

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(8) G. W. ライプニッツ

Scientists and Engineers in German Stamps (8). Gottfried Wilhelm Leibniz

筑波大学名誉教授 原田 馨
KAORU HARADA

Professor Emeritus, University of Tsukuba.



西ドイツが1960年に発行した偉人切手G. W. ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)の記念切手。彼は哲学者、数学者であると共に万能学者であった。

G. W. ライプニッツ

G. W. ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)はドイツの哲学者、数学者、政治家でライプツィヒ大学の哲学教授の息子として生まれ、幼少の頃から秀才の誉れが高く神童と云われた。ライプツィヒ大学で法学と哲学を学び、次いでイェナ大学で数学を学び、若くして法学博士となった。彼は政治活動を行いながら、フランス、イギリス、オランダの多くの哲学者、科学者と交流し、高名な西ヨーロッパの科学者、哲学者(スピノザ、ホイヘンス、ベルヌイ、ボイルら)と知人になった。1676年ドイツに帰り、ハノーファー公に政治家、学者として仕えながら多方面の知的貢献を成し遂げた。

ライプニッツは一種の天才であり、あらゆる知的分野に積極的に乗り出しこれらの問題を解決した。数学に於てはニュートンとは独立に微積分法を発見し、その優先権をニュートンと争った。この論争はニュートン学派の人々によりライプニッツに不利な判定がなされた。物理学では活力説を唱え、力学的エネルギーの恒存説を主張した。またカトリックとプロテスタントの統一のような大問題にも関与したが、これは失敗に終わった。ライプニッツはアカデミーの設立を計画し、1700年に「ベルリン科学アカデミー」の設立に関与し、その初代会長となって、知識人のための新しい知的活動の場を創り出した。経済学、政治学、外交問題にも関心を寄せ、特に哲学においては单子論(モナドロジー)を展開した。

イギリスのアン女王が死亡し、イギリス王室には後継者が居ないことから、ハノーファー公(George)がイギリスの王位を継ぎジョージ一世となった。公はイギリス王であると共にハノーファー公であり、イギリスに移ったが英語が話せなかった。有名な天文学者W.ハーシェル(William Herschel, 1738-1822)はハノーファー生まれの音楽家であったが、ハノーファーの市民はイギリス市民でもあることになり、彼はイギリスに渡り、独学

で偉大な天文学者になった人である。ライプニッツは公と共にロンドンに移ることを希望したが、公はこれを許さず、ライプニッツはハノーファーに留まらねばならず、その地で没した。

第二次世界大戦末期にハノーファー市が破壊されるまで市内にライプニッツがそこに居住していた「ライプニッツハウス」と云う美しい建物があった。その建物は戦時中破壊されたが、「新ライプニッツハウス」が場所は異なるが市内に再建された。写真で見ると新しい建物は古い建物と外観が同じである。この新しいライプニッツハウスは現在小博物館として利用されている。週に2日開館するので見学することができる。ライプニッツハウスの展示品で特に目につくものには彼が製作した加減乗除のできるメカニカルな計算機がある。この計算機はパスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) が作った計算機より性能が高いと云うことである。展示品にはその他印刷物が多く、肖像もあった。市の中央から少し離れた公園に大理石製のライプニッツの記念建造物 (Leibniz Temple) がある。中央に大理石の胸像がある。ライプニッツの美しい大理石の立像がライプツィヒ大学の大講堂のそばにある。

ライプニッツはハノーファーで没したが、彼の墓は市内のプロテスタントの教会 (聖ヨハネ教会、St. Johanniskirche) にある。プロテスタントの教会は、祭事の時以外は閉まっているので、ライプニッツの墓所を訪ねるには訪問の予定を教会に告げておく必要がある。墓は教会内にあり、厚い石板の墓石に、OSSA LEIBNITH とのみ刻まれている。

哲学においてライプニッツはモナド (Monad, 単子) を基本とする哲学モナドロジーを構想した。モナドとは単位実体で、非延長的、非物質的で精神的なものである。我々はライプニッツのこのような発想の中にドイツ観念論哲学の誕生を見ることができる。

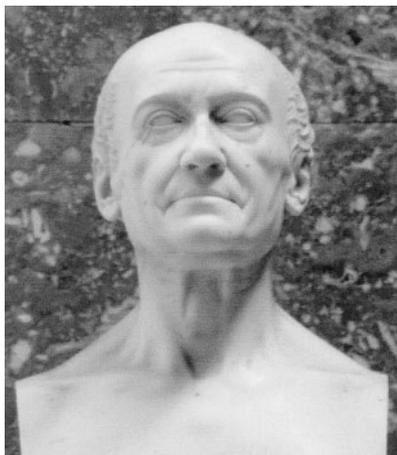
本稿に利用した写真は著者が撮影したものである。



ライプツィヒ大学の大講堂前に立つ G. W. ライプニッツの立像



G. W. ライプニッツの墓のあるプロテスタントの聖ヨハネ教会 (St. Johanniskirche)。



レーゲンスブルクに近いゲルマン人の殿堂ヴァルハラ (Walhalla) に展示された G. W. ライプニッツ像。

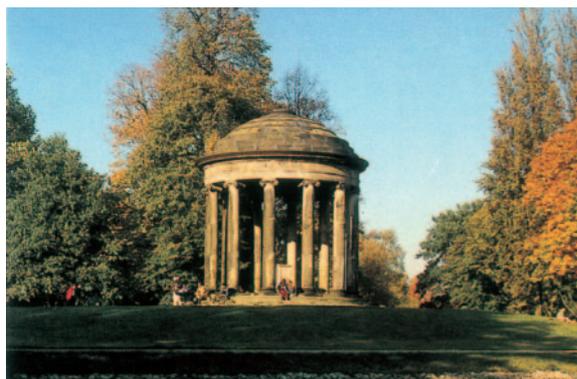


教会内部にある G. W. ライプニッツの墓。墓石には OSSA LEIBNITH と刻まれている。

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(8) G. W. ライプニッツ



G. W. ライプニッツ生誕(1646)350年を記念する統合ドイツ発行の記念切手。



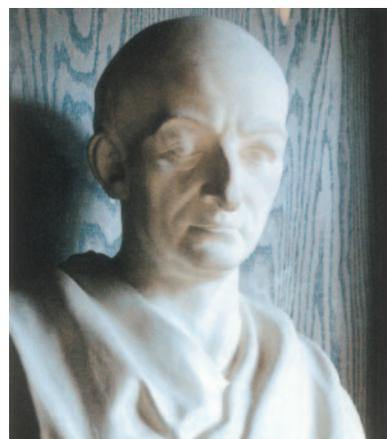
ハノーファー市の公園にあるライプニッツテンプレ(写真はハノーファーの案内パンフレットから)。



ハノーファー市に再建された新ライプニッツハウス、建物の外観はオリジナルの破壊されたものと細かい部分まで同じである。この新しいライプニッツハウスは現在小博物館として利用されている。



新ライプニッツハウスの開館時間を示した展示板。



新ライプニッツハウスに展示されたライプニッツ像。



新ライプニッツハウスに展示された計算機、その性能はパスカルの作った計算器より高性能であったと云う。

表紙写真

紅葉のハクサンタイゲキ(白山大戦) トウダイグサ科

この周辺を圧倒する鮮やかな赤は、9月に北アルプス唐松岳登山の折に八方尾根で見かけたものです。他の草花に比べ、ハクサンタイゲキは最も早く色付きはじめるようですが、別名ミヤマウルシとも呼ばれ、その名のようにウルシの赤も連想する色付きです。背丈はおよそ50センチ前後、亜高山帯までのあまり高くない山に分布します。

(写真・文 北原)

編集後記

ケミカルタイムズは、本誌で通巻194号となり、昭和25年(1950年)3月、創業精神がこめられた創刊号の発行以来54才となった。時代の研究、工業の発展に望まれる幅広い範囲の化学薬品を、「試薬」として追求し、「用途と純度のそれぞれの観点」から時の要請を追求してきた弊社の足跡が、ケミカルタイムズには残されている。改めて創刊号からページをめくると、温故知新の思いが募り感慨深い思いがする。

多くの研究者のご好意と熱意で寄稿された論

文の全てが、一つ一つの足跡となり、折々の試薬の姿が反映されているように思う。今年54才になる本誌には、編集に際しある種の尊厳をも感じる次第です。

第200号の発行は1年半後となるが、187号からA4版に改変したこともあり、数冊ではあるがバックナンバーを製本し、ささやかながら記念として残すことに決定した。次世代の社員はじめ、編集委員への参考資料になれば幸いに思うと共に、今後ますます充実したケミカルタイムズを目指していきたい。



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号
 電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560
 インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>
 編集責任者 古藤 薫 平成16年10月1日 発行